



二葉亭四迷原稿  
 平凡  
 四

214  
 4401  
 4



本  
年  
十  
月  
十  
一  
日  
寄  
贈  
二  
郎  
氏

へ14  
4401  
4

特

# 平凡 (二十九)



二葉亭

私<sup>わかし</sup>は先<sup>さつせ</sup>刻<sup>せき</sup>から存<sup>ぞんざい</sup>在<sup>ざい</sup>を認<sup>みと</sup>めてあ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ないや

う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>か<sup>か</sup>ら、其<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>際<sup>さい</sup>に、雪<sup>ゆき</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ないや

江<sup>え</sup>に<sup>に</sup>さん<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>面<sup>めん</sup>を<sup>を</sup>視<sup>み</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ないや

視み  
て  
あ  
ら  
う  
ぶ  
つ  
と  
が

雪江ゆきえ  
さん  
は  
又また  
あ  
ら  
う  
ぶ  
つ  
と  
が  
の  
孫まご  
子こ  
を  
ザ  
ロ  
ク

と  
視み  
始はじ  
る  
と

又俯向またうつむいて  
いて  
膝ひざ  
前まへ  
一尺いちせき  
通とお  
り  
の  
處ところ  
を  
伝つた

未雨みづ  
が  
不意ふい  
に  
此方こなた  
を  
向むか  
い  
こ  
の  
ど  
か  
ら

其その  
面めん  
が

私わたし  
は  
あ  
ら  
う  
ぶ  
つ  
と  
が

好よ  
く  
て  
私わたし  
が  
う  
つ  
か  
り  
而しか  
を  
視み  
て  
あ  
ら  
う  
ぶ  
つ  
と  
が

美よ  
麗う  
ら  
か  
つ  
と  
が  
若わか  
い  
女おんな  
は  
何處どこ  
と  
ぞ  
く

方あ  
と  
と  
消い  
へ  
ば  
新い  
め  
や  
う  
さ  
し  
め  
、  
好よ  
評ひやう  
は  
に  
は

欲こ  
で  
、  
田き  
い  
桑わ  
で  
、  
二重ちゅうじゅう  
題だい  
で  
、  
包いろ  
白しろ  
で  
袋あひら  
が

それ  
と  
も  
三みつ  
つ  
位くら  
年ねん  
下した  
か  
し  
知し  
れ  
な  
い  
が  
、  
あ  
ら  
う  
ぶ  
つ  
と  
が

「新へ  
屋は  
何處に  
すゝめ？」

と阿母さんの  
方を  
向く。

「え？  
と阿母さんは  
何の  
事をして  
居る？」

の  
かい？  
玄圓協の  
盆が  
からうと  
思つ

「あんな  
處！」

と雪江さんが  
一寸驚くのを  
阿母さんが

服  
に物を  
言を  
しつゝ  
行く

「彼處が  
一番  
明く  
つて  
好い  
から」

「さうして  
一切の  
意味を  
いひ  
めて、  
雪江さ



紙用稿原聞新日朝京東

寸<sup>い</sup>案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>してお<sup>お</sup>上<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>し。  
 行<sup>い</sup>つて<sup>つ</sup> 荷<sup>に</sup>物<sup>もの</sup>の始<sup>し</sup>末<sup>まつ</sup>でし<sup>し</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>い。  
 しと<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>ね。  
 今<sup>いま</sup>案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>ます<sup>す</sup>か<sup>か</sup>ら、  
 や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>方<sup>ほう</sup>を<sup>を</sup>向<sup>む</sup>いて、  
 荷<sup>に</sup>物<sup>もの</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>書<sup>その</sup>信<sup>ま</sup>で  
 ぶ<sup>ぶ</sup>、<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>じ<sup>じ</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>、<sup>も</sup>奥<sup>おく</sup>は<sup>は</sup>若<sup>わか</sup>出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>と  
 阿<sup>あ</sup>母<sup>は</sup>さん<sup>の</sup>  
 彼<sup>あ</sup>方<sup>ち</sup>へ  
 雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>お<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>一<sup>いち</sup>

紙用稿原聞新日朝京東

~~お<sup>お</sup>帰<sup>かえ</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>つ</sup>て~~  
 と、  
 が<sup>が</sup>ラ<sup>ラ</sup>ツ<sup>ツ</sup>と<sup>と</sup>門<sup>かど</sup>の<sup>の</sup>開<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>音<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>て、  
 折<sup>ひ</sup>柄<sup>が</sup>ラ<sup>ラ</sup>く<sup>く</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>車<sup>くるま</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>門<sup>かど</sup>前<sup>まへ</sup>に<sup>に</sup>止<sup>と</sup>る  
 ん<sup>ん</sup>は<sup>は</sup>澄<sup>すみ</sup>して<sup>して</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>た。  
 と、  
 が<sup>が</sup>ラ<sup>ラ</sup>ツ<sup>ツ</sup>と<sup>と</sup>門<sup>かど</sup>の<sup>の</sup>開<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>音<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>て、  
 大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>魚<sup>いし</sup>

中

續ついでいで中へ入つと。  
 魚いさなは明あきらふいとソつと  
 雪江ゆきえさんが術まじと一入つとから、私わがしも  
 此處こゝよし。  
 雪江ゆきえに訪まじごか一間いっまあし。  
 縁側えんがはを後戻りして又雪江一出いっしゅつと、成程なるほど  
 雪江ゆきえ脇わきに行いごか一間いっまあし。

女の後あと次女ついでといふものは悪わるくないものだ。  
 ボンの色いろは彼かれは様色やまいろといふのが知ら。若わかい  
 私わがしより昔むかしが低いひくい。ふツくりしと束とく多たで、り  
 跟あとに随ついて今度は縁側えんがは一出いっしゅつと。雪江ゆきえさんは  
 雪江ゆきえさんが起おこつとから、私わがしも起おこつと其その  
 跟あとに随ついて今度は縁側えんがは一出いっしゅつと。雪江ゆきえさんは



体こいにきん疵きずどらけで、  
 上じやう座ざのえん鉛えん筆ひつのらく落らく書かきのあ痕あとをと留とど  
 て、  
 人ひと現まのやくに底ぞこをいてる。無む論ろん  
 一いつし所ところ壊こわれをと取とりつくつとあ痕あとがさい莫さいらい球たまをえ描かい  
 のと所ところでは  
 濁ぬ黒くろいへん色いろで  
 すき、壁かべはく之これ来きた何なに色いろどらか分わからんが、今いま  
 一いつし所ところ壊こわれをと取とりつくつとあ痕あとがさい莫さいらい球たまをえ描かい

窓まどがあらう。雪ゆき江えさんが其そのをあらうて笑れこの  
 小こしあらうくらうこから、尚なほほやくく視み廻まわ  
 をみ見みらうと、品た品みはち茶ちや福ふく色いろど。西にしにあらうりの小こ  
 ッつとしてあらう足あし福ふくへどつこから、先まづし下した  
 けらど、何なんどか落らく暗あんいち長なが回わい望ぼうで、入いらうとぶ  
 窓まどがあらう。雪ゆき江えさんが其そのをあらうて笑れこの  
 小こしあらうくらうこから、尚なほほやくく視み廻まわ  
 をみ見みらうと、品た品みはち茶ちや福ふく色いろど。西にしにあらうりの小こ  
 ッつとしてあらう足あし福ふくへどつこから、先まづし下した  
 けらど、何なんどか落らく暗あんいち長なが回わい望ぼうで、入いらうとぶ





紙用稿原聞新日朝京東

新の荷物に目を留めて、  
 貴方の荷物を見て  
 視廻してゐるとが、  
 ふと片隅に積んであつ  
 ても音頭展にぐらとわ  
 と空にはこんは部屋の申  
 何時の間にか間に掃除し  
 こんどよ。それで  
 部屋は。

紙用稿原聞新日朝京東

腰法の新聞紙の刺れと  
 落から隔して  
 大疵が窓と面を出して  
 みる。天井を仰向い  
 て視ると、徳方此方の  
 雨漏りの穴、曇した  
 やうな染物、  
 半平木様物のやまも  
 模  
 何ごかきびの悪いやう

紙用稿原聞新日朝京東

ちよ。  
 ちよ。  
 なるに、  
 好いです、  
 回つて来るから。  
 必要ない。  
 インじから、  
 使つても好く。  
 と、  
 矢張り壁を視詰め、  
 した儘で。  
 なに、  
 好いです、  
 明日回つて来るから、

紙用稿原聞新日朝京東

ちよ。  
 なるに、  
 好いです、  
 回つて来るから。  
 必要ない。  
 インじから、  
 使つても好く。  
 と、  
 矢張り壁を視詰め、  
 した儘で。  
 なに、  
 好いです、  
 明日回つて来るから、

本當に好くツてよ、然う遠慮しないで

今携つて来てよ、七碟の舞ふやうに翻

然りと身を翻して、部屋を出て、姿は直ぐ見

えなくざらとが、其處らで若い華やかで聲

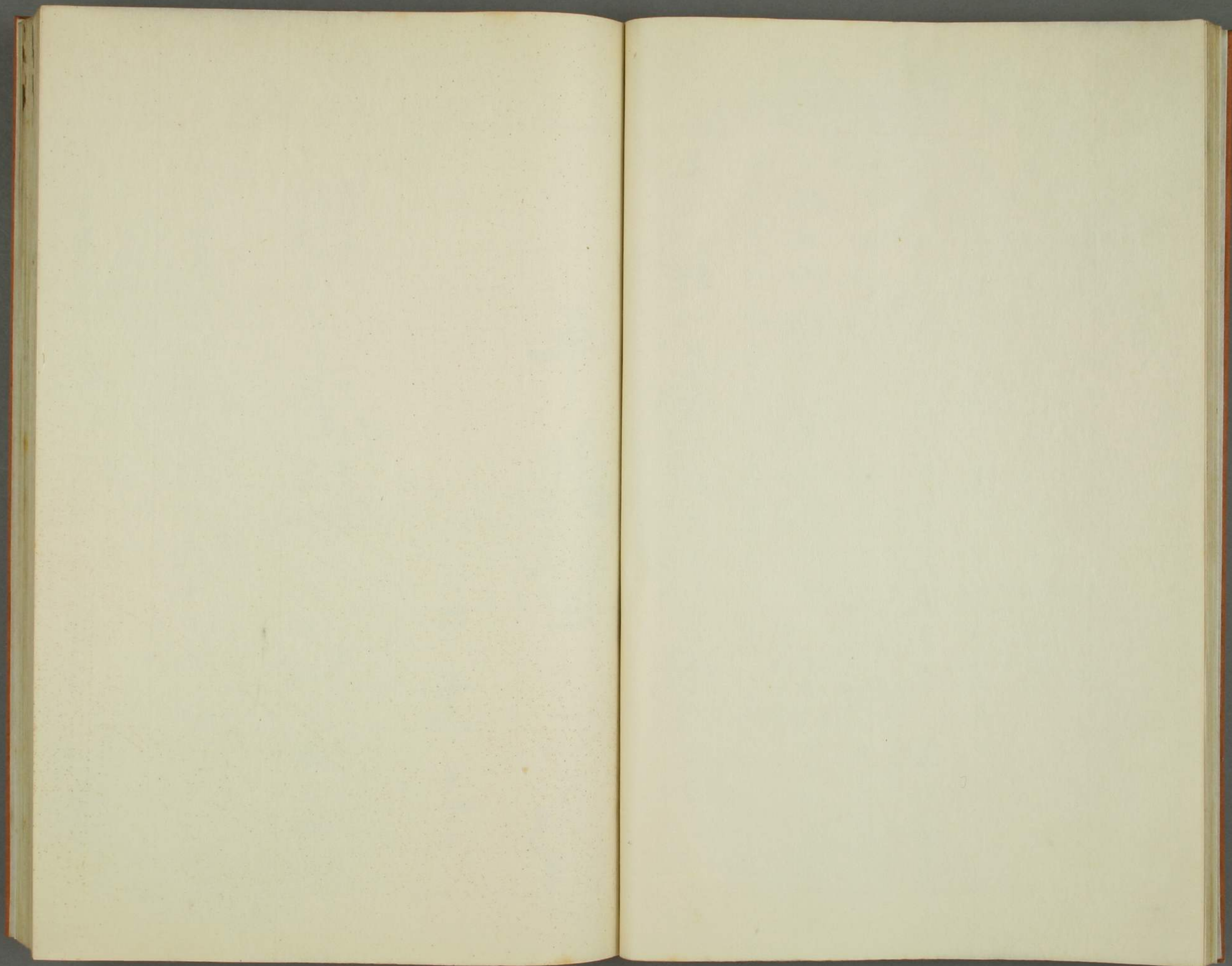
で、其代り小こくツてよ、といふのが聞

え、軽い足音がパタ〜と襦袢を行く。

私は荷物の始末を忘れて、雪江さんの出

て行つと跡をうツかり見てみる。事に字

と、口を開いてみたかもし知れぬ。



紙用稿原聞新日朝京東

平凡 (三十一) し

二葉亭

晩ばん翠すいににざざららととてて  
其その晩ばんはは私わたくしもも奥おくでで御ご馳ちりり

ままににざざららとと。  
花はな模も楸すのの丸まるボボヤヤのの洋やう燈とうのの下したでで

隅すみににははああららととがが、  
此こゝとと一ひとつつ食しょく学がくにに對たいしし、

紙用稿原聞新日朝京東

若い雪江さんの  
~~...~~  
話を聞きながら、阿

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

紙用稿原聞新日朝京東

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

又さん阿世さんの  
芝居をひとみ

紙用稿原聞新日朝京東

やあでめては、  
何でも苦悶する、  
と心つて辛抱して

品行の慎、  
勉勵も人一倍、  
信するから

に半掛けおぼやめといふ話で、  
聴いてる

ても面白くも哀愁もない話だから、  
雪にさ

んは話半ばに小欠び一つして、  
起つて

行方へ行つて了つと。  
私は少し本意が

つしが、やがて奥平らと處で現るの言がする。

雪江さんに遠い。  
雪江さんはおぼ

ろめどと見え、  
翠の音色は何じかボコン

ボコン、  
ベコン、  
ボコンといふやうに聞え

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>ぢや。手<sup>て</sup>不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>の處<sup>ところ</sup>で君<sup>きみ</sup>の世<sup>せ</sup>話<sup>わ</sup>をすゝの  
 つ<sup>つ</sup>こが、  
 二<sup>に</sup>田<sup>でん</sup>が<sup>が</sup>コ<sup>コ</sup>ン、三<sup>さん</sup>田<sup>でん</sup>でベ<sup>ベ</sup>コ<sup>コ</sup>ンとい<sup>い</sup>ふやうに  
 聞<sup>き</sup>えて、何<sup>なん</sup>じか<sup>か</sup>で、話<sup>わ</sup>も<sup>も</sup>能<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>分<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>か  
 分<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ中<sup>ちゆう</sup>に話<sup>わ</sup>は進<sup>すす</sup>んで  
 集<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>話<sup>わ</sup>論<sup>ろん</sup>に入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>て、  
 一<sup>い</sup>で、家<sup>うち</sup>も下<sup>げ</sup>女<sup>ぢよ</sup>一<sup>ひと</sup>人<sup>り</sup>外<sup>が</sup>使<sup>つか</sup>うて居<sup>ゐ</sup>らん。手<sup>て</sup>

紙用稿原聞新日朝京東

人<sup>ひと</sup>の勤<sup>きん</sup>定<sup>てい</sup>高<sup>こう</sup>い話<sup>わ</sup>を聴<sup>き</sup>いてお<sup>お</sup>と、琴<sup>こと</sup>の音<sup>ね</sup>  
 遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>音<sup>ね</sup>に雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>さん<sup>さん</sup>の琴<sup>こと</sup>を聴<sup>き</sup>きながら、  
 何<sup>なん</sup>も<sup>も</sup>言<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>も悪<sup>わる</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>と思<sup>おも</sup>つ<sup>つ</sup>こ。  
 て妙<sup>めう</sup>じつ<sup>じつ</sup>た<sup>た</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ど、何<sup>なん</sup>も<sup>も</sup>言<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>も私<sup>わ</sup>は<sup>は</sup>鳴<sup>なり</sup>物<sup>ぶつ</sup>は<sup>は</sup>好<sup>この</sup>



紙用稿原聞新日朝京東

がやから、<sup>まじく</sup>家<sup>あつか</sup>扱ひにははさん。  
そりや手<sup>て</sup>

紙<sup>かみ</sup>で所<sup>かど</sup>みさん<sup>とつ</sup>も<sup>ま</sup>言<sup>い</sup>うて上<sup>あ</sup>げてあるか

ら、<sup>きみ</sup>ゑる<sup>こころ</sup>心得<sup>えん</sup>てうちやらうな？

「は。」

「<sup>へん</sup>からして<sup>ま</sup>池<sup>い</sup>沼<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>間<sup>ま</sup>には、<sup>さ</sup>少<sup>い</sup>一<sup>い</sup>家<sup>い</sup>事<sup>い</sup>も

手<sup>て</sup>傳<sup>つた</sup>うて<sup>い</sup>貴<sup>た</sup>け人<sup>い</sup>と<sup>い</sup>田<sup>た</sup>う。<sup>こ</sup>まに、<sup>て</sup>手<sup>て</sup>傳<sup>つた</sup>ふとい

うて<sup>い</sup>大<sup>お</sup>し<sup>い</sup>と事<sup>こと</sup>ぢやない。<sup>ま</sup>あ、<sup>て</sup>取<sup>と</sup>次<sup>つ</sup>位<sup>い</sup>の<sup>も</sup>も

のぢや。<sup>ま</sup>実<sup>ま</sup>が来<sup>き</sup>、<sup>ま</sup>或<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>郵<sup>ま</sup>便<sup>ま</sup>が来<sup>き</sup>、<sup>ま</sup>其<sup>ま</sup>れ

が暗<sup>く</sup>に<sup>い</sup>取<sup>と</sup>次<sup>つ</sup>いで<sup>い</sup>世<sup>よ</sup>界<sup>かい</sup>の<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>重<sup>あ</sup>き<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>、<sup>ま</sup>世<sup>よ</sup>事<sup>こと</sup>ぢや

まじ<sup>い</sup>何<sup>なに</sup>ぞ<sup>い</sup>角<sup>かく</sup>ぞ<sup>い</sup>預<sup>よ</sup>の<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>も<sup>あ</sup>らうが、<sup>ま</sup>まに

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

大しし事ぢやない。行つて貰へやうない。

「は、何で、僕に出来ませう？」

「そ、その僕が面白くない。君僕と

いふのは同輩或は同輩以下に對つて言ふ言

葉で、尊敬者に對つて言ふべき言葉でない。

そんな事も注意して、僕といはずに私とい

うて貰はんとない。

「は、不知氣が附きませんで」

「それから、も一つ言つて置きたいのば、

我々の呼ぶ方がや。もうゑの年配では伯父伯

紙用稿原聞新日朝京東

ん

紙用稿原聞新日朝京東

母さんで可笑しい。これは東京の習慣通り、  
 矢張り私の事は先生と言うとら好からう。先  
 生、此方が御而會を預はれます、先生、お  
 使に行つて参りませう——一向可笑しうな  
 い。先生というて貰はう。

紙用稿原聞新日朝京東

「は、承知しました。」  
 「で、私を先生といふ日になると、執方ひ  
 家内の事は奥さんと言えんと、権衛が取れ  
 ん。先生に對する奥さんぢや。な、私が先  
 生、家内が奥さん、——可笑しいか？」

紙用稿原聞新日朝京東

「は、承知しませしと。」

これで一通り訓戒が済んで、後は自慢話

にしろと。先生も法律は晩學で、最近はい

何か二も辛かつとが、その辛いのを辛抱しと

お蔭で、今日では内務の一言属、何とかの

係長たることを得たのだといふ話を長々と

聴かされて、私は痒が切れて、耐へ切らな

くぢつて、泣出し加つた。

辛と放免されて、暗黒を探索して長四疊

へ帰つて来ると、ト女が薄暗い豆ランプを

紙用稿原聞新日朝京東

「は、承知しませしと。」

これで一通り訓戒が済んで、後は自慢話

にしろと。先生も法律は晩學で、最近はい

何か二も辛かつとが、その辛いのを辛抱しと

お蔭で、今日では内務の一言属、何とかの

係長たることを得たのだといふ話を長々と

聴かされて、私は痒が切れて、耐へ切らな

くぢつて、泣出し加つた。

辛と放免されて、暗黒を探索して長四疊

へ帰つて来ると、ト女が薄暗い豆ランプを

持とつて来きて、  
 床とこを敷敷つつたら  
 志わすれれずずに  
 清けくく  
~~...~~  
 四よ回かいいいて  
 行いつつて  
 了しまつつつつ。

此こ家ゝの  
 伯おぢ父ぢさん  
 の先せん生せいは、  
 昔むかし困こまつ

てろと時とき、  
 家いえで  
 教おしええ世せ話わををしし人ひとじじから  
 悪わるく

いやういにははして笑わられれままいいと父ちちがが言いつつつつ。

私わしも其その氣きで使つかつつて来きののだだが、  
 使つかつつて来きて  
 小こは事こと毎ごとに案あん外がいで、  
 何なんだだか妙めうなな氣き持もちががす

私わしは家うちがが怠こましくくななつつつつ。

平凡

(三十二)

ニ世ホス

私わたくしは早はや速すみ錦にしき所の菜さい私わたくし立た法ほう律りつ修しゆ夜やの生せい徒たに

へ入い學がくの手て續つづを濟すませ其その處ところ

らて、珍めづらしい中ちゆうは執しやく心しんに勉べん力りきもしこが、

飯いを忘わすり豚とん子こやらしこ。それには程ほど々々架か因いんが

其その中ちゆうに

あゝが、第一の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生——私は口惜しいから斯う

いふ——伯父さんの先生は、用といつても

大しと事ぢやないと言つた。成程一命に關

はるやうな大しと事ではないが、併し其大

しと事でない用が同断なく有る。まづ朝は

下女と強ど同時に覺されて、兩戸を明けさ

せられる。伯母さんの奥さんと分擔で座敷

の掃除をさせられる。其が濟むと、今度は

私一人の専任で庭から、玄關先から、門前

から、勝手口まで掃か(丸)せられる。少(すく)いで

も塵芥(じんがい)が残(こ)つてゐると、掃直(はきあた)しを命(めい)ぜられ

るから、丁寧に亭麗(ていれい)に掃(は)かな(や)ならん。是(これ)

が中々(ちゅうぢゅう)の大後(だいご)の上に、時々(ときとき)其(その)座(ざ)らの草(くさ)むし

り迄(まで)やらされて、等(が)に(ガ)蹴(か)り事(こと)もある。

朝後(あさご)を濟(すま)せて伯父(おぢ)さんの先生(せんせい)の出勤(しゅつぎん)を見(み)

送(おく)つて了(しま)ふと、学校(がっこう)は午後(ごご)から、其(その)迄(まで)は

身体(からだ)に一寸(いちゆん)隙(ひま)が出(で)来る。其(その)暇(ひま)に角(かく)分の(ぶん)勉(べん)

修(しゆ)をすゝのだが、其(その)上(うへ)へ時々(ときとき)急(いそ)ぎな騰(とう)写(や)物(ぶつ)

やど吟(いん)咄(つた)つて全(ぜん)漬(つけ)にな(な)る。



事こともあつた。さもなくば内うちで取次とりつぎどが、此こゝに  
 迄ま使つかひ遣やられて、つくぐ辛つらいと思おもつと  
 ち務つとめらせらるゝて、  
折衝せつしょうの雨降あめふりも用捨もちうなく、遠方とんぱう  
 ふ。時ときには竹たけの用もちどか知しれぬ用もち子こ、年紙としがみ  
 かのと、紙藝しげい所用しゆようの外ほかは、竹たけ子こでも私わたくしを使つか

御ご役やくを申ま出だすのどか、急いそいで申ま出だし居やへし  
 それ、卸便いっぴんを出だして来こいの、やれ、お寄よりに  
 を待兼まちかねしやくに、後あとからくしと用もちを吟ぎん咄ぶつら。  
 とう痰たんうに後あと所ところから返いけて来て、新あたらし歸かへり  
 夕ゆふ方がた学がく校こうかへ歸かへると、伯父おぢ又またさんの先せん生せいは

中

好い。伯父さんの先生の、昔は、  
 構は、高人の、取次がして  
 になら。でも、相手が、  
 てあしけれど、向倒いから、構はず倒さ  
 家内の物議を惹起して、度々喧嘩しく言え  
 取次に出して、倒さになら。私のお辞儀は

見えと申す。中々、  
 と来す。聞えん。凡も、  
 錢の一枚も讀む。かと思ふと、もう頼まう  
 構は、高人の、取次がして  
 になら。でも、相手が、  
 てあしけれど、向倒いから、構はず倒さ  
 家内の物議を惹起して、度々喧嘩しく言え  
 取次に出して、倒さになら。私のお辞儀は

秋中帽子を冠らぬ人は、之を取次ぐに大に  
 六くしいのは風味め飾り立派でない人で、  
 狼狽して、飛んで出て来る事もある。一妻  
 はれす氣遣ひはよい。又て伯父さんや先生  
 者一つ動かさぬ代り、取次いでいり小言を言  
 限つて尊大振つて、私が倒さにかうても、  
 立派な髪を束ねて人にもまじない。そんなのに  
 見ると、持つて来と物を持ちつて取らない。  
 うくと二つ返事で、早速お通し申せと来

うくと二つ返事で、早速お通し申せと来  
 上機嫌だ。其代り其様な客の序の序を  
 持つて来と物を持ちつて取らない。  
 立派な髪を束ねて人にもまじない。そんなのに  
 見ると、持つて来と物を持ちつて取らない。  
 限つて尊大振つて、私が倒さにかうても、  
 者一つ動かさぬ代り、取次いでいり小言を言  
 はれす氣遣ひはよい。又て伯父さんや先生  
 狼狽して、飛んで出て来る事もある。一妻  
 六くしいのは風味め飾り立派でない人で、  
 秋中帽子を冠らぬ人は、之を取次ぐに大に

て	と	ぐ	ふ	て
ろ	と	奴	と	は
へ	、	が	、	大
と	小	者	千	人
い	言	さ	三	し
小	を	か	つ	く
。	言	、	と	、
私	つ	是	舌	は
は	て	は	打	い
腹	、	人	し	、
水	唇	の	て	然
面	ふ	見	、	う
を	い	別	此	申
し	と	が	孫	し
て	言	出	者	ま
平	ら	来	を	し
寄	て	ん	取	こ
に	返	で	次	と
起	し	困		い

れ	ま	言	生	て	警
か	す	つ	名	、	戒
と	か	と	利	之	を
腹	か	い	を	を	要
で	と	い	一	持	す
は	い	ふ	見	つ	る
議	。	。	ち	て	。
論	唇	唇	さ	奥	自
を	を	を	や	へ	筆
か	唇	唇	、	行	の
が	を	を	面	く	名
ら	唇	唇	を	と	刺
、	を	を	唇	、	か
口	唇	唇	唇	伯	を
へ	を	を	唇	父	出
出	唇	唇	唇	さん	さ
し	唇	唇	唇	の	れ

しない。すうと、  
最後には流々會いはすう

が、後で金を持っ  
てかかるといつて、三日

沸々言つてめう。

沸々言つてめう。  
関はないが、斯ういふ處を

流々言つてめう。  
関はないが、斯ういふ處を

家の書生だ。  
伯父さんの先生の高生、其氣

で、と見えて、  
或時人に対して家の書生

がといふのを聞いと事もある。  
利手方が

新井の末、  
どかう、無理もないが、  
出入りの者

が、  
書生扱にする。



つとのめは私が若かつしからうた。監叔を頼ま  
 れしからう、引受けて、席に書生にして使小  
 一これが即ち親切といふもので、此外に  
 別に親切といふものは人間に無いのだ。有  
 りかも知れんが、私は一寸見當らない。

不平で、耐らないが、一々辯解して居  
 うれんから、私に誠を據どころなく承不  
 承に小孤家の書生にされて了つて、而して  
 月々衣料を拵つてみる。

は	う	が	つ	し	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
は	う	が	つ	し	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平
う	が	つ	し	が	の	中	は	折	々	の	便	に	不	平

体こ好よく書し生せいににさされれて  
 私わはは忘わしくくててせせら

平凡 (三十二)

二葉亭

紙用稿原聞新日朝京東

を編して違つたが、其も後には帛と止めて

つと。さればとりつて取扱ひがなつとの

ではない。利便さず書を扱にされて、小ッ

甚くコキ使つて、果は下女の事であつと

靴襪きなるも私の後子辰塔へつと。無論

私は懐激しと、特程下宿しやうかと思つと

が、思つとばかりで、下宿もせんで、考せら

れ、儘に靴襪して、而して回えへは其を

隠して居と。少し妙めやうだが、なに、妙

でも何でもない。私は実は富江さんに惚ル

紙用稿原聞新日朝京東

其時は



て  
み  
と  
う  
で

惚ほれてははみみしが、夫それからからら雪ゆき江えさんさんをを如ごとく

い  
し  
や  
う  
と  
い  
ふ  
氣きははずずかかつつと。其その時とき分ぶんはは初はつめ

ま  
ご  
ろ  
心こころいいららたたかから、正ただ直ただにに女おんなにに惚ほれれるるの

は  
男おとこ児このの秘ひ匿かくすすとと心こころ得とててみみと。女おんなをを赤あかいいののは

左ひだり程ほどのの罪せ惡ごとともも思おもわわららるる程ほどががつつととが、苟いやしくも

男おとこ児こがが女おんなふふんんぞぞにに惚ほれれてて性しやう根ねをを失うふふど、

そ  
ん  
ぞ  
者ものああつつと、そ  
ん  
ぞ  
ややくくごごなな根こん性じやうでで行なが

出で来きと、息いき巻まいていてみみと。が、口くちでで息いき巻まく

程ほどににはは心こころでで思おもつつててみみたたかかつつととかから、自じ分ぶんも

憶かれと終據しやうこには、雪江ゆきえさんが留字りゆうじだと、  
 ってみしのだ。  
 か  
~~おぼろげにも~~  
 次し初はつなく憶かれて了しま  
 い。が、実じつは憶かれたとおも思おもえぬ申まうに、いつ  
 な、憶かれんぞするものか、と  
~~ま~~  
 遺ちがひな

注ちゅう意いしたら、私わたくしは屹きつと度ど真まに、失敬しやくけい  
 ら、若わし其その次じ誰たれかど而ゆえと向むかつて私わたくしに然さうと  
 に然さうと自認じにんし得えぞかつと氣味きみがあるか  
 のだが、流石さすがに囚とらはれしめを心こころちて、明あきらか  
 いつか其程そのほどに操作ひんせきする意こころに囚とらはれて了しまつと  
 注ちゅう意いしたら、私わたくしは屹きつと度ど真まに、失敬しやくけい

紙用稿原聞新日朝京東

東	ず	い	し	雪
ま	眠	寝	が	江
て	さ	夜	ら	さん
、	う	姿	。	は
指	な	で	阿	宵
の	向		母	ッ
先	して	唇	さん	強
で	ふ	の	に	だ
<del>眠</del>	ら	露	度	か
無	く	は	々	ら
理	と	ま	々	。
に	様	だ	々	
眼	部	だ	々	
を	を	だ	々	
押	出	だ	々	
開	て	だ	々	
け		だ	々	
。		だ	々	

紙用稿原聞新日朝京東

何	心	何	雪	雪
と	が	を	江	江
ぞ	藻	し	さん	さん
く	脱	て	の	の
り	け	み	身	身
り	て	る	に	に
が	雪	か	深	深
行	江	は	う	う
く	さん	大	そ	そ
わ	の	抵	い	い
ら	の	他	い	い
。	身	時	か	か
	に	で	か	か
家	深	ら	か	か
に	う	知	か	か
暮	そ	女	か	か
ら	い		か	か
は	も		か	か
	辰		か	か

紙用稿原聞新日朝京東

は	幅	い	は	出
ら	今	て	北	て
か	を	あ	が	行
つ	持	こ	依	く。
と	っ	。	い	髪
か	て	紫	か	は
ら	出	の	ら	学
。	て	包	ッ	ぶ
い	行	を	て	束
っ	く	抱	。	髪
も	後	へ	高	だ
共	姿	て	い	っ
時	が	。	木	た
刻	私	長	屑	が
に	は	い	を	。
は	好	柄	好	髪
。	く	の	い	物
	っ	輪	て	。
	て	。	穿	

紙用稿原聞新日朝京東

こ	雪	笑	な	目
か	江	は	い	の
ら	さ	せ	と	裏
。	ん	。	。	を
。	ば		。	赤
。	一		。	く
。	ツ		。	反
。	橋		。	し
。	の		。	て
。	さ		。	足
。	ら		。	せ
。	学		。	え
。	校		。	。
。	へ		。	。
。	通		。	。
。	っ		。	。
。	て		。	。
。	る		。	。

何<sup>なに</sup>んか  
吟<sup>いん</sup>を  
ぬ<sup>ぬ</sup>顔<sup>かほ</sup>  
して  
部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>の  
窓<sup>まど</sup>から  
外<sup>そと</sup>を  
見<sup>み</sup>て  
み

と、  
雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>  
んは  
見<sup>み</sup>ら  
小<sup>こ</sup>て  
ろ  
とは  
氣<sup>き</sup>が  
附<sup>つ</sup>

か  
ず  
に  
一<sup>いち</sup>寸<sup>すん</sup>  
お  
尻<sup>しり</sup>を  
撫<sup>な</sup>で  
し  
から  
髪<sup>かみ</sup>を  
壊<sup>こわ</sup>す

まいと  
依<sup>い</sup>く  
屋<sup>い</sup>あ  
び  
徐<sup>じゆ</sup>と  
潜<sup>ひそ</sup>つ  
て  
出<sup>で</sup>

て  
行<sup>ゆ</sup>く  
が  
時<sup>とき</sup>と  
す  
と  
前<sup>まへ</sup>に  
こ  
い  
と  
後<sup>うしろ</sup>

を  
振<sup>ふり</sup>向<sup>む</sup>  
いて  
私<sup>わたくし</sup>と  
顔<sup>かほ</sup>を  
看<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>せ  
る  
事<sup>こと</sup>が  
あ  
る  
さ

う  
す  
と  
雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>  
さん  
は  
音<sup>ね</sup>聲<sup>こゑ</sup>を  
出<sup>で</sup>す  
と  
う  
り

と  
見<sup>み</sup>せ  
ん  
何<sup>なん</sup>の  
意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>  
も  
な  
く  
莞<sup>わん</sup>爾<sup>に</sup>  
す  
る  
私<sup>わたくし</sup>は

疾<sup>はや</sup>から  
出<sup>で</sup>さ  
う  
な  
莞<sup>わん</sup>爾<sup>に</sup>  
を  
顔<sup>かほ</sup>の  
何<sup>なん</sup>處<sup>ところ</sup>へ  
か  
押<sup>おし</sup>込<sup>こ</sup>め

て  
強<sup>し</sup>ひ  
て  
真<sup>ま</sup>面<sup>めん</sup>  
目<sup>め</sup>を  
作<sup>つく</sup>  
つ  
て  
あ  
る  
の  
だ  
か  
ら

雪江ゆきえさんの笑顔えんがほに誘さそはれと、耐こらへ切きれな

くちらうて不覚ふせつ莞爾にっこりす。かうして莞爾にっこりに對たい

すくに莞爾にっこりを以もつてすうのを一日いちにちの樂しゆめしみに

して、其そのをせぬ日は何なんとぞく物足ものたりりなく思おも

つと。つと。りや、四よの無ない話はなしさ。

# 平凡へいふん(三十四)

## 二葉亭

午後ごごはりらも秋あきが學まなば一行いっけいつと留とど守まもりに、

雪江ゆきえさんが帰かへらうて船ふねで、掛違かけちがつて違ちがはな

が、雪江ゆきえさんは昨きのう帰かへると、おまた今いまのお稽けい

古に近所の法師さんの處へ行く。初は一

度何かで法師さんが早く行く時、然々廻道を

して其前を通つて見た事がある。三味線の

法師さんと違つて、琴の法師さんの家

は格子戸作りでも、腰腕にもあつてと

入口に琴曲指南山勢の人何とりの何と

優しい書込み書いと札が掛けてあつた。窓

と格子戸の中を覗いて見ると、赤い鼻緒や

海老茶の鼻緒のすかつと、赤い鼻緒が三

四足行儀よく並んで中に、一足紫紺の鼻緒

の可愛らしめが、り隙に遊ばせんと小く版

素て、あゝ。之を見違へておもしろのが、雪

江さんのだ。大方まじ奥に取違つてチンと

澄し〜るゝに遠いないと思ふと、そのチン

と澄し〜るゝ一目 ~~と見と~~ くぢら〜

が、生憎孫子が切つてあゝので、沙かぢ

は見えなやのい。味気な音がまゝばかりど。

積る古物などから捨てるしいばかりで、遊ば無いか

わど、それでも羽は何處か希しい。雪江さ

んは、近次大い上平にぢらとけれど、雪江さ

三



んでばぢいぢうだ。大方ぢいぢいぢいぢら

う、ぢいぢいと思ひぢがらう、うツかり覗いてお

しが、ふつと気が付くと、  
先刻の例で  
行儀のハッパ

かりの厚力の思が、青凍をぬりし、不思議

さしに私の向を壁上げする。子供でも極

りが寒くやうつて、匆々に其處の門口を誰か

て帰つて来し事もあつとつけがミ

夕方は何にか混雑して落着かぬ申にも、

一寸好い事が一つあつ。ランプ掃除は下女

の程だが、夕六之に火を點けて、座敷可

12

入りの暇いよ、  
 写真撮みごの、  
 何ごの(●)用  
 どの(●)体裁よく  
 列べてあつて、  
 留字の中は  
 活字(●)と  
 行辨いておろ  
 けれど、  
 帰つて来ると、  
 書物を出さ  
 ぬしにしたり、  
 毛筆の球を  
 擲がし  
 して  
 引取りす。  
 何かに  
 つかれて  
 ランパ  
 配

一、一寸(●)の  
 部属は、  
 奥の四品  
 まで、  
 便所の側  
 じりわ  
 と、  
 一寸(●)の  
 部属は、  
 奥の四品  
 まで、  
 便所の側  
 じりわ  
 雪江さんの  
 部属への  
 権利があつた。  
 雪江さん  
 へ配する  
 のは  
 私の後だ。  
 其時  
 だけは  
 私に  
 公然

りか<sup>か</sup> ~~晩~~<sup>かた</sup> ~~く~~<sup>く</sup> ~~な~~<sup>な</sup> ~~つ~~<sup>つ</sup> ~~た~~<sup>た</sup> ~~時~~<sup>とき</sup> ~~ふ~~<sup>ふ</sup> ~~ど~~<sup>ど</sup> ~~は~~<sup>は</sup>  
 もう夕<sup>ゆふ</sup> 園<sup>せみ</sup> が ~~新~~<sup>あたら</sup>  
 酒<sup>さけ</sup> へ 行<sup>い</sup> 渡<sup>わた</sup> っ て 荷<sup>しん</sup> 暗<sup>くら</sup> く ざ ら し 申<sup>まを</sup> に  
 机<sup>つくえ</sup> に ~~た~~<sup>かん</sup>  
 此<sup>や</sup> 頬<sup>ほ</sup> 杖<sup>づえ</sup> を 杖<sup>つ</sup> い て 雪<sup>ゆき</sup> 江<sup>え</sup> さん の 眼<sup>め</sup> 鼻<sup>ばな</sup> の 穴<sup>あな</sup> か  
 ら ぬ 顔<sup>かほ</sup> が 唯<sup>ただ</sup> 田<sup>たま</sup> と 白<sup>しろ</sup> く 見<sup>み</sup> え 。 何<sup>なに</sup> と なく  
 詩<sup>し</sup> 的<sup>てき</sup> じ 。

晩<sup>おそ</sup> く ざ ら し じ 。  
 と ぶ つ と ら ば じ の 私<sup>わが</sup> も 雪<sup>ゆき</sup> 江<sup>え</sup> さん じ け 子<sup>こ</sup> は  
 言<sup>い</sup> ひ っ け ぬ  
 お 世<sup>よ</sup> 辭<sup>じ</sup> も 不<sup>ふ</sup> 覚<sup>かく</sup> 少<sup>せう</sup> て 机<sup>つくえ</sup> の 上<sup>うへ</sup> の 毛<sup>け</sup> 線<sup>せん</sup> の ラン  
 フ 敷<sup>い</sup> へ 窓<sup>まど</sup> と ラン プ を 載<sup>の</sup> せ じ と  
 中<sup>ちゆう</sup> じ 要<sup>い</sup> ら ぬ け ぬ  
 一<sup>い</sup> へ へ ぬ 始<sup>はじめ</sup> 末<sup>すえ</sup> まで

雪江さんは峠度新ういよ。これが伯父さ

んの先生でも者らうものぢら、口を尖がら

かして、ツとキ廻して早うせにやね好

！と来る所だ。大したバンバンの相違だ。

だから、家で人間らしりのは雪江さんだか

りたと言ふのだ。

其儘出て来るのが、何じか飽氣なく、

今日貴嬢の環のお師匠さんの前を通り

ましと。一寸好い家ですな。

「あら、さうし、と雪江さんがいふ。心持

此話が甚厚しにら、  
 如何なる面白話にな  
 るのだか分からんのだ  
 けれど、其程の時に  
 つて、生憎と糸の間  
 邊で伯母さんの奥さん  
 の意地悪が私を呼ぶ。

古屋さん！  
 早くランプを  
 何をもて

さうさなお、四時ごろ  
 でした。

ちや、私の行つた時  
 じわねえ。

えい、と私は何にか  
 極りが悪くならて

俯向いてしまふ。

首を傾げて、何時ごろ？

紙用稿原聞新日朝京京

岡が  
々々  
して  
る  
ン  
じ  
ら  
う  
ね  
え。  
』  
た  
い  
ま

~~本  
書  
の  
目  
録~~

残<sup>こり</sup>情<sup>を</sup>  
しい  
け  
れ  
ど、  
仕<sup>し</sup>方<sup>かた</sup>  
が  
ない、  
其<sup>その</sup>切<sup>き</sup>り  
で

私<sup>わたくし</sup>  
は  
雪<sup>ゆき</sup>  
江<sup>え</sup>  
と  
ん  
の  
部<sup>へ</sup>  
屋<sup>や</sup>  
を  
出<sup>で</sup>  
て  
了<sup>しま</sup>  
ふ。

紙用稿原聞新日朝京東

ハ 無<sup>ナ</sup>く<sup>ナ</sup>ば<sup>ナ</sup>。 誰<sup>ナニ</sup>と<sup>ト</sup>見<sup>ミ</sup>て<sup>テ</sup>も、 先<sup>マ</sup>づ<sup>ズ</sup>松<sup>マツ</sup>陰<sup>カゲ</sup>先<sup>マ</sup>生<sup>ナ</sup>を

差<sup>サ</sup>向<sup>ム</sup>け<sup>テ</sup>。 日<sup>ヒ</sup>分<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>喜<sup>ヨ</sup>後<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>隠<sup>カ</sup>れ<sup>テ</sup>み<sup>ま</sup>せ<sup>し</sup>。

一<sup>ヒト</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>年<sup>トシ</sup>老<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>人<sup>ヒト</sup>物<sup>モノ</sup>は<sup>ハ</sup>な<sup>い</sup>。 在<sup>ア</sup>湖<sup>ウミ</sup>の

木<sup>キ</sup>匠<sup>シヤウ</sup>連<sup>レン</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>トコロ</sup>下<sup>シ</sup>生<sup>ハ</sup>て<sup>テ</sup>。 田<sup>イハ</sup>之<sup>ノ</sup>長<sup>ナガ</sup>く<sup>ク</sup>時<sup>トキ</sup>彼<sup>カ</sup>從<sup>ス</sup>信<sup>シン</sup>し

て<sup>テ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>由<sup>ユ</sup>來<sup>ライ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>未<sup>ミ</sup>連<sup>レン</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>未<sup>ミ</sup>也<sup>ナ</sup>。

紙用稿原聞新日朝京東

味んや字のなるは是事方々學者ぶかり、尚不諳

もどく見えども、  
 此は彼も皆陰先生の前

一 ~~松~~ <sup>ひとこま</sup> 留りもなく <sup>えい</sup> 歎 <sup>ま</sup> 止す <sup>それ</sup> ~~松~~ <sup>ひつやん</sup> 陰先生

の <sup>うしろ</sup> 後 <sup>かく</sup> 二 <sup>み</sup> 陰 <sup>と</sup> 入 <sup>あひ</sup> 相 <sup>あひ</sup> 年 <sup>と</sup> は <sup>あひ</sup> 松 <sup>あひ</sup> 陰 <sup>あひ</sup> 先生

に <sup>ま</sup> 戻 <sup>か</sup> け <sup>い</sup> の <sup>ま</sup> で <sup>い</sup> 二 <sup>ま</sup> 戻 <sup>か</sup> け <sup>い</sup> の <sup>ま</sup> で <sup>い</sup> は <sup>ま</sup> 早 <sup>い</sup> が



平月（二十七）

二葉亭

い	に	前
そ	雪	美
小	は	に
は	さん	も
決	を	断
し	如	つ
て	何	て
無	か	置
い	し	い
。	や	と
度	う	通
を	と	り
怪	思	私
し	つ	は
か	と	学
う	事	習
ん	は	真
事	な	鈕

紙用稿夏聞新日朝京東

を(車)形(つ)て、人(は)知(ら)ず(其)を(喜)し(む)で(居)る(の)

は(事)実(じ)つ(と)水(みづ)ど、勅(しやく)業(ぎやう)債(さい)天(てん)と(男)る(ひと)が(出)る(こと)

或(ある)せ(ぬ)ぬ(か)う(胎)業(ぎやう)用(よう)を(す)す(格)で、不(ふ)ん(口)言(ご)言(ご)

恣(し)じ(か)か、証(しやう)心(しん)居(ゐ)留(りゅう)字(じ)に、一(いち)寸(すん)入(い)ら(し)つ(て)

や(い)よ、と(年)松(ねまつ)が(と)わ(て)、(事)實(じ)つ(と)と(思)ふ(こと)

拍(はつ)子(し)に、自(じ)然(ぜん)と(終(はつ)つ)の(害(がい)ひ)出(い)し(こ)の(は)即(すなは)ち

武(ぶ)者(しやく)害(がい)ひ(じ)ど、千(せん)載(ざい)一(いつ)返(へん)の(好(こう)機(き)會(かい)、返(へん)し(て)な

ら(も)の(か)と(い)ふ(や)う(な)氣(き)お(に)ざ(ら)て、必(いっ)ず(先(せん)に

ざ(ら)て(武(ぶ)者(しやく)害(がい)ひ)と(吹(ふ)き)止(と)め(て)、何(なに)れ(は)お(顔(かほ)を

して、呼(よ)べ(れ)る(儘(まま)に)雪(ゆき)江(え)さ(ん)の(部(へ)屋(や)の)前(まへ)

の(前(まへ)に)

紙用稿原聞新日朝京東

紙用稿原聞新日朝京東

山	言	杯	が	行
ま	ふ	杯	勃	行
ま	本	強	然	く
ま	は	つ	而	と
ま	鈍	て	を	り
ま	く	み	挙	入
ま	解	て	げ	り
ま	ら	み	し	入
ま	ら	初	と	り
ま	か	め	見	り
ま	つ	而	ると	り
ま	と	を	、	り
ま	が	見	何	り
ま	、	て	ど	り
ま	側	何	か	り
ま	に	ど	言	り
ま	焼	か	小	り
ま	芋	言	、	り
ま	が	小		り

紙用稿原聞新日朝京東

入	を	雪	物	み
入	言	江	で	ら
入	つ	さ	ば	か
入	て	ん	な	ら
入	一	は	い	ら
入	寸	は	が	ら
入	躊	不		ら
入	躇	降	何	ら
入	した	が	政	ら
入	た	大	じ	ら
入	が	好	か	ら
入	、	物	年	ら
入	思	い	中	ら
入	切	ら	空	ら
入	つ	ら	腹	ら
入	て	た	を	ら
入	申	私	感	ら
入	へ	は	じて	ら
入		好		ら

み  
ら  
か  
ら  
、  
長  
後  
日  
た  
ら  
て  
十  
切  
信  
は  
し  
て  
や  
す

物  
で  
は  
な  
い  
が  
、  
何  
政  
じ  
か  
年  
中  
空  
腹  
を  
感  
じ  
て

雪  
江  
さ  
ん  
は  
不  
降  
が  
大  
好  
物  
い  
ら  
た  
。  
私  
は  
好

入  
つ  
て  
う  
つ  
し

を  
言  
つ  
て  
、  
一  
寸  
躊  
躇  
し  
た  
が  
、  
思  
切  
つ  
て  
申  
へ

雪  
江  
さ  
ん  
は  
不  
降  
が  
大  
好  
物  
い  
ら  
た  
。  
私  
は  
好

雪江さん

男が、  
此時ばかりは辛<sup>い</sup>ところであつた。

切に勤められれば、  
難者<sup>あつた</sup>うくとばか

り言つて、  
辛<sup>い</sup>を出さなかつた。  
何<sup>なん</sup>だか

う<sup>く</sup>とぢつて、  
夢<sup>ゆめ</sup>中で、  
何<sup>なん</sup>が事務<sup>じむ</sup>にでも

ま<sup>ま</sup>れたやうな心<sup>こころ</sup>持<sup>もち</sup>で、  
是<sup>こゝ</sup>から先<sup>さき</sup>は如何<sup>いか</sup>なる

事<sup>こと</sup>やら、  
方角<sup>はうかく</sup>が分<sup>わか</sup>らなくらう、  
行<sup>い</sup>つて

し、

責<sup>あつか</sup>は  
遠<sup>とほ</sup>慮<sup>りよ</sup>のねえ。  
男<sup>おとこ</sup>ツて出<sup>で</sup>る

意<sup>い</sup>すゝも  
ぢやなくッてよ。

と何<sup>なん</sup>にも  
知<sup>し</sup>らぬ  
雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>さん  
が  
燧<sup>やせ</sup>草<sup>くさ</sup>の  
匂<sup>にお</sup>と

又眞江にやうて、  
 何どか譯の分らぬ事を口  
 の中で言つて、  
 周章して、  
 類考すと、  
 あら、  
 皮ごと喰べて、  
 皮は取らして、  
 皮が  
 好いわ。  
 なに、  
 構をいんです、  
 と仕方が無いから、

手を出さぬ譯にも行かぬやうて手を出す  
 と、  
 生憎手先がぶくと裳へやが。  
 如何して昔袂に裳へのつゝと雪江さ  
 んが不審さうに前を視る。私は怒狼狽して、

紙用稿原聞新日朝京東

愛に一寸吹流して回上り必要がある。  
私は是

これで漸く合點が行つてい  
る、それよりも

先刻  
行つてい  
るよ。

母さん、早めに行つてないと  
おぼつかうよ。

嫁人でせう家は、だから、又さんも所か

紙用稿原聞新日朝京東

今晩が暮子さんのお連れ入ふん  
です。

を止めて、私共とも知らずかつしけど、

「ま田さんへ」と雪江さんは皮を剥く幸

は、入らして、

皮を剥く  
みんしゃく、

より先春名梅啓といふ書物を讀む。一体

小説が好まうで、回に分けて時分が軍記物や

仇討物は読んだが、まじ人情本といふ

白い物のなることを知らずかつこ。これの

知り初めが仰る此春名梅啓で、神田に下宿

しとろく及遠の處から、**書由**松陰傳と一編

に借りて束て始て讀むのが、**洲学**に面白か

つし。此梅啓に據ると、斯ういふ場合に男

の言ふべき文句がある。河でも貴嬢は浦山

と思はざいかとか、何とか、ヒヨイと軽く

より先春名梅啓といふ書物を讀む。一体

小説が好まうで、回に分けて時分が軍記物や

仇討物は読んだが、まじ人情本といふ

白い物のなることを知らずかつこ。これの

知り初めが仰る此春名梅啓で、神田に下宿

しとろく及遠の處から、**書由**松陰傳と一編

に借りて束て始て讀むのが、**洲学**に面白か

つし。此梅啓に據ると、斯ういふ場合に男

の言ふべき文句がある。河でも貴嬢は浦山

と思はざいかとか、何とか、ヒヨイと軽く

戯談を言つて水を向けるのだ。思切つて一

つ言つて見やうか知らぬと思つたが、何い

か、どうもソノ極りが悪い。

「大言を派なうまなよ。何せぬね、  
心算の

が、四碑の行くで、そんならね、まじ長持の

はさみで  
扱箱の

あ、もう駄目だ。長持や扱箱の託にな

つちや大事云つと、後悔し、  
後付か

ない。雪江さんは、何處か面白いか、を

の長持や扱箱の託に夢中なうてりつて、



其それから其それと話はなし續つけて、成なり返かへしたくも盛も返かへ

す隙すきがない。仕し方が魚ういから、今いまに又また機をり會あ

も方ちらうと、雪ゆき江えさんの話はなは浮うの空そらに聞きい

て、只ひひ其その機をり會あを待まつてふくと、忽とちがう

ッしと障やま子が開あいて、

「あら、おたのしみ！」

吃びりして振ふり、下か女の格まが何なに時とき

「ア」  
戻もどつたのか、見みともない面つらを辯ま弁べんに衣いさう

に、葉は一いつかせし立たつてやが、私わは餘よ程ほど飛ひ

戻もどつて、横よこ面つらをガガとと、毆はり曲まげてやらうか

二  
三  
活  
を  
し  
て  
め  
し  
申  
に  
夕  
に

て  
減  
茶  
こ  
こ  
に  
や  
ら  
て  
つ  
と  
が  
松  
が  
あ  
つ  
て

千  
載  
一  
馬  
の  
好  
機  
命  
も  
松  
に  
邪  
魔  
を  
入  
れ  
ら  
小

二葉亭

平凡 (三十八)

②

と  
思  
つ  
た  
。  
腹  
が  
立  
つ  
て  
く  
ゝ



紙用稿原聞新日朝京東

るやうで、心は中々に忙しかつた。婚禮に  
 私の部屋をランプを眺めて徒然としてお  
 私の部屋へ迄聞えろ。  
 て、臺所で器物を洗ふ水の音がボシヤク  
 泣かない。唯おどかりの音は仕舞で忙しさを

紙用稿原聞新日朝京東

夕方には用が忙しかつた。三人づらくに  
 て、私はランプ配りやら、戸締りやら、一  
 切りの準備をして、倒る通り部屋で暖炉を焚す  
 と、まゝと身体に暖が出来る。雪江さんは一  
 番先に御役を喰べて、部屋へ戻ると、佳音沙

紙用稿原聞新日朝京東

呼ばれて行つと ~~と~~とすくと 主人夫婦

東 ~~は~~ 来ど問が者ら。 傍ら申に今一度

雪江さんと美向ひみどりとい。 美向ひにな

つて何とすとのどか ~~私~~にも ~~未~~らないか

兎 ~~み~~ 角美向ひみどりとい。 是れ ~~北~~やりとい

雪江さん ~~の~~ 新屋 ~~一~~ 行く

河 ~~か~~ 口實はよいが、口實は ~~こ~~と 深捲くけれ

ど ~~口~~ 實が着付からない。 うづくして ~~お~~

り ~~で~~ 息心であると、ふと ~~横~~ 側にパタリし

と ~~こ~~ 美がすし。 ~~主~~ 侯へ ~~来~~く。 確 ~~か~~ 子雲に

ん ~~じ~~ 新屋の ~~美~~ と ~~通~~ 張して ~~臺~~ 所へ行くが

其の ~~美~~ 美が

せ

美<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>世<sup>よ</sup>中<sup>ちゆう</sup>と<sup>と</sup>違<sup>ちが</sup>ひ<sup>ひ</sup>して、  
 子<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>相<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 ど、  
 世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>美<sup>み</sup>物<sup>ぶつ</sup>に<sup>に</sup>形<sup>かたち</sup>白<sup>しろ</sup>の<sup>の</sup>羽<sup>は</sup>織<sup>おり</sup>を<sup>を</sup>着<sup>き</sup>て、  
 私<sup>わたし</sup>は<sup>は</sup>常<sup>じょう</sup>に<sup>に</sup>一<sup>いち</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>さん<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 一<sup>いち</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ

開<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>て、  
 心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ  
 心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ。  
 不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>着<sup>ちやく</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>れ

となく目に留まる。

あ、おれい者ものに禁とへうれいのだ。神かみよ

こといひいいや)が氣きにやうて、  
と論ろん莞爾にこ

くくと相あ手を向むて、

い、え、い、あ、お入いんがさかい。

「ぢや、私わたし読よして行くわ。奥おくは一人ひとりで淋さみ

しいから。」

珍ちん密みつ々々、  
之これを愛あい待まちせん法ははない。よ、

よ、と雪ゆき江えが掛かけ舟ふねとして障しょう子こと明あけやうと

すしけれど、  
開あかぬないの、  
私わたしは飛とんで行いつ

紙用稿原聞新日朝京東

て力任ちからまかせにウレといさちり用もちけと。何なにどうも飲ええか

らぞくくすう程ほどいい。

生あいにく増いと火鉢ひばちは新あたらの部へ屋やには無なけルど

今いま迄まで復かえいてみと赤あかゲツトを回まわりに温ぬむわどめ

を中央ちゆうおうに持もち出して、正ただしく裏うら及およびにして袖そで

めと、遠慮えんりよするのか、それとも小汚こがいと

思おもつた、  
麻あのか、  
糸いとは

あるといふ、  
雪江ゆきえさんが、  
私わたしは

黙だまつて部屋へやをぬ出でしと、  
雪江ゆきえさんは吃く

るくり、  
私わたしは雪江ゆきえさんの部屋へやへ行いく

座名園を据うて戻して之を敷かせし  
是

ごけは我ながら一生の出來だつと思ふ。

席が出来ると、雪江さんが、

「貴方、御役が喰べられませんか、私何は行

でも喰べられませんか、倭り先刺さるん

ごめんごから

と微笑すよ。何が見ても面白くない。

私も矢張り笑ふして、

「私も喰べられませんか、」

大嘘、実は平生の通り五杯喰べよう。

別



はまッ  
どけい  
りつもの  
後すべし

紙用稿原聞新日朝京東

電江さんは回廊わびも東京音ちどから

「……にもお草が有つて？」

「有りますとも」

「ぢや、帰つても不自由はないわねえ」

と又微笑す

私も高笑し。電江さんの言葉草が可笑か

つこばかりぢや、実は胸みゆる娘しさや

ら、仔やら角やら取交せて高笑ひしこのぢ。

それから四の詠にやうて、四の女學生は

如何なる風をしてみよの、英語は行位の程度

紙用稿原聞新日朝京東

別冊

紙用稿原聞新日朝京東

の、  
洋楽は流行するか  
のと  
其は  
事ばか

り、  
私は大事の用を控へてみるのど。

其は  
仕方がないから  
相手

に  
チヨツ、  
松の葉まが

柳花に  
東やが  
つと

ゆきに

